

中国残留日本人・中国帰国者の人生が問いかけること

第4回 戦後の中国を生きる 国籍・民族の壁を越えて

中国残留日本人は、日本敗戦の混乱の渦中、中国の地で中国人によって妻または養子として引き取られました。夫・養父母となった中国人の多くは、農民・労働者・零細自営業者(露店・行商)など、貧しい民衆でした。

ごく一部の残留日本人は、夫・養父母になった中国人に虐待されました。また大多数の残留婦人は、見ず知らずの言葉も通じない中国人男性との「望まざる結婚」で、筆舌に尽くしがたい苦勞をしました。

しかし、ほとんどの夫・養父母は、深い愛情をもって残留日本人とともに家族を作り上げていきました。「悪いのは日本軍国主義。日本人も中国人も普通の民衆は皆、戦争の被害者」、「国籍は関係ない。死にそうな女性や子どもの命を救うのは、人として当然」。いずれも、夫や養父母になった中国人の言葉です。

1945年、日本が敗戦・撤退した後も、中国は政治的混乱の連続でした。国民党と共産党の内戦により、多くの民衆が流浪・餓死しました。1949年に中華人民共和国が成立した後も、無謀な大躍進政策で産業が崩壊し、1959年から3年間にわたる大飢饉で数千万人が餓死しました。1966年以降は、10年間に及ぶ文化大革命で社会・経済・教育が崩壊し、多数の犠牲者が出ました。

しかも残留日本人は、「日本人」として差別・迫害されました。特に文化大革命時代、「日本のスパイ」という無実の罪で糾弾・暴行され、僻地に追放された人もいます。

ただし、こうした過酷な人生は、残留日本人だけのものではありません。多くの中国民衆の共通体験です。文化大革命では多くの中国民衆もまた、「地主・富農の血統」、「国民党・アメリカのスパイ」など無実の罪で理不尽に糾弾・迫害されたのです。

それだけに残留日本人と中国民衆はつねに庇いあい、助け合い、互いの命をつないできました。

多くの残留日本人の記憶の中で、中国は今も「命を助けてくれた寛大で優しい国」であり続けています。それは国籍・民族の壁を越え、苦難をともに生き抜いてきた民衆としての連帯感・共同意識の表れといえましょう。